育てられている時代に育てることを学ぶ(6)

―小学生を学びの主体とした「保育教育」の試み

＝「教室での赤ちゃんとの出会い」から―

金田　利子
高山　直子

はじめに

家庭科が小学校に置かれて（一九四七年）以来ずっと五年生（男女共に）からがその対象になってきました。低学年は生活者であっても、生活を対象化するには、この発達年齢がふさわしいからと考えられます。

低学年家庭科は生活の量と質の変化をめざして自主編成カリキュラムにおいて七十年代に二、三の実践が見られましたが、四十七年当時の指導要領には「家庭建設という生活経験は教科課程のうちに必要欠くべからざるものとして取り上げるべきで、家庭生活の重要さを認識するために」「小学校五、六年において男女共

に」と述べられています。

けれども、保育教育となると、小学校家庭科の学習指導要領において位置づいたことはいまだかつてありませんでした。これは、保育教育が「親になるための教育」としてとらえられてきたからではないかと考えられます。

しかし、この連載のはじめ（七月号）に述べましたように、保育教育の本質を「育てられている時代に育てることを学ぶ」ところにおくならば、この教育は、小学生はもちろん、生まれたときから必要なことと言えます。

そこで、本連載は、これまで指導要領に保育教育のある、中学校と高等学校における実践を取り上げてきましたが、今回から二回は、いまだかつて意識的に実践されたことのない小学校と幼児教育機関における「保育教育」について、それぞれ一回ずつ取り上げることにしました。

小学校以下の子どもが学びの主体となるという保育学習の意義と意味については、終盤で触れることにし、ここではまず、当保育研究室と静岡大学附属浜松小学校の高山直子氏との共同で行った研究的実践の様子を高山氏に報告していただきます。

小学校での保育教育の試み

小学校の家庭科には「保育」の領域はありません。また、少子化傾向の強い現代において、乳幼児を意識したり、接したりする体験は、本校の子どもたちにはほとんどないといってもよいのです。

今回、大学（生）の研究に協力するということで、本校の六年生の子どもたちが乳幼児とかかわる機会を与えられました。

「育てられている時代に育てることを学ぶのは、自己を知り、自己をつくる教育にもつながる」と言われていますが、それは小学校の教育においても、非常に重要なことだと考えます。子どもたちが乳幼児とかかわることで、子どもたちが自己を見つめ、自分たちの生

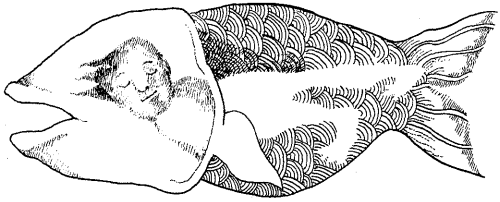
活や自分自身、家族に対する意識をどう変化させていくのかを見ることができる良い機会として、子どもたちの学びを見ていきたいと考えました。

以下に、「教室に赤ちゃんがやって来る」の実践を通して、子どもたちがどんなふうに学び、意識がどう変化したのかを述べたいと思います。（この実践は、平成十三年九月下旬から十二月上旬の間に、月一回の間隔で赤ちゃんとお母さんが学校にやってきて子どもたちとふれあったものです。三回の授業が行われ、授業者はいずれも静岡大学の金田先生、事前・事後指導は附属小教諭の高山が担当しました。）

「教室に赤ちゃんがやって来る」の事前実践より

赤ちゃんに対するイメージは？

「来週赤ちゃんがこのクラスにやってきます。」と言うと子どもたちは、「なぜ？」「何しに？」と言いながら、戸惑ったようなうれしいような表情を見せました。事前の実態調査では、家族に赤ちゃんがいるという子は二名で、多くの子は、赤ちゃんと身近に接した経験がありません。「赤ちゃんと聞くとどんなことを思い浮かべますか」という質問に対して、多くの子が「かわいい」「小さい」と答える中、家庭に赤ちゃんのいる子は「泣くとうるさい」「何でもすぐ壊す」というように、ただかわいいだけでなく、大変な面もあるという捉えをしていることが分かりました。



また、一人だけ「赤ちゃんは少し気持ち悪い」と感じている子がいました。この子（M男）がこれから赤ちゃんにどのように接し、どんなことを感じ、考える

ようになるのか注目していきたいと思いました。

赤ちゃんとふれあう子どもたち

一回目の授業

子どもたちは、少し緊張気味で遠巻きに赤ちゃんを囲み、様子を見ていました。赤ちゃんがおもちゃで遊ぶ様子やお母さんにだっこされてあやされている様子などを興味深げに見ていました。また、お母さんからの、家庭での赤ちゃんの様子や育てる上で大変なことなどの話は真剣な表情で聞いていました。しかし、だっこをしてみるように促しても、なかなか自分の方からだっこをしようとする子はいませんでした。

その日の子どもの感想には次のようなことが書かれていました。

「…さわるとすごくふわふわしてすごくかわいくって、今度十一月に会うときはだっこしてみたいです。」

前述したM男は「久しぶりに赤ちゃんを見ました。生まれてから五ヶ月とは思えないほど元気に動き回っていました。しかも、お母さんが泣き声や表情だけで赤ちゃんの気持ちが分かるそうなので、僕も表情を見てみましたが、何を考えているのか全く分かりませんでした。そして、つきっきり面倒を見ている親はすごいなあと思いました」という感想を書いています。他の子どものように赤ちゃんをかわいいと思う気持ちは伝わってはきませんが、親のすごさ、たいへんさに着目していることが分かります。

二回目の授業

子どもたちは赤ちゃんに会うのをとても楽しみにしていました。前回と違い、自分の方から赤ちゃんにかかわろうとする子が増えてきました。

一ヶ月ぶりに会う赤ちゃんの変化に子どもたちは目を見張りました。

「人見知りをするようになってびっくりした」「髪の毛がたくさんになった」「足を元気に動かして、はいはいをしようとしている」など、多くの変化を見つけました。

三回目の授業

子どもたちは、赤ちゃんと遊びたい、かわいがりたいという思いと共に、どう成長しているのかを見るのが楽しみという思いも沸いてきたようです。

グループで順番に赤ちゃんと遊ぶように促すと、子どもは我先にと赤ちゃんのところへ行っておもちゃであやしたり、声を掛けたりし始めました。赤ちゃんがびっくりするぐらいの勢いです。M男も赤ちゃんのそばで、おもちゃをもってあやそうとしています。

本時が最後ということで、子どもたちは名残惜しそうにいつまでも赤ちゃんとかかわっていました。

実践から見えてきたもの

―小さな赤ちゃんの大きな力―

子どもの感想から次のような意見が出てきました。

「一ヶ月でもいろいろできるようになっていた。短い間にいろんなことを覚えてすごい。」

「赤ちゃんはかわいいという気持ちだけじゃ育てられ

▲三回目の授業の最後に赤ちゃんと遊ぶ子どもたち

ないんだなと思った。」

「赤ちゃんも自分の気持ちをちゃんともっているし、一生懸命いろんなことにチャレンジしているんだな。」

「赤ちゃんの時代があって今がある。」

「私もこんな風に大切に育てられてきたんだ。」

M男は、自分の気持ちの変化として「赤ちゃんをあまり嫌いではなくなった」と書いています。

赤ちゃんに対するイメージは「汚い」「いたずら」など、まだマイナスのイメージに偏っていますが、実際に赤ちゃんの笑う様子や愛らしい様子、成長していく様子を間近に見ることで、気持ちの変化が起きたのだと思いました。

以上のような表れから、赤ちゃんと実際に継続的に接すること、親からの話を聞くことで、客観的に親子関係を見つめたり、赤ちゃんを人格のある人間として大切に考えたりする気持ちが育まれてきたように思います。自分が親になったときのことをイメージさせるのは小学生にはまだ遠いように感じましたが、赤ちゃんと自分を重ね合わせて、自分も大切に育てられてきたんだというように、自分の家族への愛情や絆を再確認する子がいたことは、家庭科の授業で大切にしたい「家族の一員としての自覚」をする上で有効だったことがうかがえます。これは、自己を見つめることができたから、気づいたことであると考えます。小さな赤ちゃんの大きな力を実感させられました。（以上高山）

教室で赤ちゃんとかかわる実践の背景と意図

「赤ちゃんが教室にやってくる」ことをはじめに試みたのはカナダのメアリー・ゴードンさんです。彼女は、子どもたちの心に「共感の根っこ」（Roots of Empathy）を育てることをねらって、一年間に九回（〇歳三ヶ月～十一ヶ月）ほぼ一ヶ月おきに赤ちゃんが教室にやってくるというプログラムを作りました。それは、それぞれに事前授業と事後授業を入れており、計二十七回で構成されています。

このプログラムは、家庭科としてではなく、共感教

育として、カナダ他の学校教育に導入されています。

しかし、これは一つの完成されたプログラムとして訓練されて資格を得たインストラクターによってのみ行うことのできるものであり、プログラムの詳細についても、インストラクターだけにしか公開されていません。

私たちはこの視点こそ、生活の中で異世代と発展的にかかわる力の基礎を育てる保育教育の狙いそのものではないかというヒントを得ましたが、内容面においては、自分たちなりに家庭科の保育教育としてプログラムを考えて実践してみることにしました。

家庭科の保育教育では、乳幼児との直接体験に意義を見出し、幼稚園・保育園に中・高生が訪問すると言う実践が積み重ねられ、かなりの成果を見ています。その上に立って、赤ちゃんを教室に迎える実践にはどんな特長があるかを考えその効果を見ることにしました。それには次のような五点があげられます。

① 発達の速度の速い赤ちゃんを継続的に見ることで発達的な変化を確かめることができる。

② 言葉以前の赤ちゃんなので、相手の思いを想像する力がより多く必要とされ、共感する力の育成が余儀なくされる。

③ 親子一緒に来ていただくので、居ながらにして親子関係を見ることができ、育てる側の立場がわかり、自分の場合と重ねて捉えやすい。

④ 一人の子ども・一組の親子という同じ人をかかわりつつ捉えることにより、同じ対象に対してクラスメートの感じ方かかわり方の違いが表われ、互いに学びの変換がより可能になる。

⑤ こちらに来ていただくことにより、学校・教室に異文化が到来することで、教室の風通しがよくなり、居ながらにして異文化交流ができる。

私たちはこうしたことの効果を確かめてみたいと、研究的実践を、附属学校等の協力で行ってみました。

しかも、学生の卒業研究とかねて行うということから、数ヶ月しか使えないということもあり、三回

（三ヶ月）という短期間での実践を試みてみた次第です。また、小学校、中学校、高等学校で実践し、その学びに発達的な特徴と三者のつながりを見出すことを合わせて狙いとしました。

赤ちゃん実践の大きな力　―その二―

先の授業の様子にみるように、小学生の保育教育に大きな力を発揮した赤ちゃんですが、連れてきてくださった親（ここでは母親）の方にとってはどうだったのでしょうか。この点について少し付け加えていきたいと思います。

協力してくださったのは、家庭科教育を専攻してきており今は小学校の先生で、育休中の方です。

ご自身の気持ちの変化として、「細かい子どもの変化に注目するようになりました。一日一日変わっていく子どもの姿を、今まで以上にうれしく思える毎日です。これだけたくさんの人に大切に思ってもらえるのだから、私も、と思います」と。

また、三回の授業を通して「S子は人見知りの時期でしたが、人見知りもある意味では、人への反応をするということなので、そういうときに多くの人に会う機会が得られたことは貴重なことだと思います。私も子どもたちの前で言った（子どものいたずらは発達してきた証ということなど、そういうときの工夫について体験を話してくださった）からにはその通りにしないと、と思い激しいいたずらにも腹を立てずにすんだりできるように思います」。

赤ちゃん実践は、学びの主体としての子どもたちにはもちろんのこと、協力してくださった親の親としての発展にもプラスになっていることがわかりました。そのことは、当の赤ちゃんにとってもよい影響につながっていくことを示唆しています。

金田（静岡大学）
高山（静岡大学教育学部附属浜松小学校）